

紫手綱

泉鏡花作

一

「餛飩屋々々。」

と木輓町邊の唯ある横町の暗い角から、何橋か、
橋の通りへ、早や戸を下ろした角店の角の柱へ、外
套の袖を掠つて、斜めに又イと出た男がある。

着た洋服は夜目に暗く、中折を引丸げて、一つ挫
いで、仰様に被つたが、外國人かと思ふほど脊高い
から、折からの暗夜が一抱きの柱となつて搖ぎ出し
たやうに、のさ／＼と大跨で。看板の心細い、孤家
の燈火めく、餛飩屋の荷の、動きもしないのに可訝
しく人を迎へて、濠へ引退る體に見えるのを、追か
けるが如く、づつと寄つた。

「おい、鍋焼。」

「へい。」

と、間違はないが、變な言葉つきに、目をきよる

つかせて覗込むと、突立つた立食者の客人の額は、高い處へ薄ぼんやりと顯れて、金縁の目金が晃然とする。髯のない、圓顔の二十五六の、餘寒に霜でも、寒さは知るまい。血氣盛なのが、蹠踉ける風に、衝と立停まる時、肩を揺つてふら／＼したのは、一杯機嫌と睨まれる。

「まあ、荷を下ろせ。」

とニヤリと笑ふ。御意のまゝ下ろした處は、丁度普請場の堀の前で、見上げる空に縦横に組上げた、棟梁の骨構が、幽に新橋あたりの電燈の餘波に映つて、雲の中に、光らぬ稻妻が走ると見えた、星のない陰氣な晩。

客は荷の中へ肩を突込むばかり、近々と無遠慮に、新道邊で評判する、美味い、鍋焼と言ふのは汝か。

「餛飩屋は揉手をして、

「えゝ、毎度御鼻屑を下さいまして、難有う存じます。」

「何、僕はまだ最初だ。御挨拶ぢや恐入るかね。
は、あ、綺麗な荷だ。おい、過般も汝を鼻屑
にする友達が、何處か其處等の横町で出會したつて
な。汝、其時、路地口で、加藥の茶葉を筈の中から
零したさうだ。泥だらけの奴を何うするかと密と見
て居たら、みづつぱなを啜り上げた手で拾ひ込んで
ざしないで、匆匆と荷を擔げて通つたつて、酷く感
心して居たよ。おい、馬鹿に評判が可いぜ。驕れ！
鍋焼。」

「何だか、鑄掛屋を談じて居るやうぢやないか。
と一人、渠の傍へ来て立つた、細面、中脊で、目
鼻立の苦味走つた、色の淺黒い、同年配の、角袖
の外套で鳥打を被つたのがあつた。……同
伴らしい、一足後れて、矢張横町から出て來た。餛
飩屋は冴えのない愛想笑ひで、

「戸外で火を扱ひますで、へい、まあ、同じやう
な身の上でございます。え、御鼻屑に、お熱く
いたして差上げませう。」

とばた／＼と火を煽ぐ、と石を伐るやうな火花か

散つて、むら／＼と湯氣の立つのが、暗がりを行く
牛の鼻息に似て、廣野のやうな夜の寂しさ。風かと
思ふと電車の響きが、床の音を立て、頭上に高い
電線を鳴つて通る。

「お待ちよ。」

と、角袖のが透る聲で、

「餛飩も貰ふがね、君に些と頼みたい事があるんだ。ねえ、」

「へい、はい……」

「厭に氣のない聲を出すな。相談があるんだ。相

談だがな、何うだ、鍋焼、細君は達者かい。」

と洋服のが大な聲する。

耳の遠いやうな顔をして、

「何でございますつて。」

「女房は達者かよ。」と、被せて聞く。

「混つ返しちや不可いぢやないか。眞面目の相談
が串戯に成つ了ふ。餛飩屋さん、此の人はね、恚う
見えて近頃獨逸から歸つて來た醫者なんだがね。病

院いんを建たてるつて用意よういした金子かねは皆みんな遊あそんじまつて、
自や棄けに飲のみ歩ありて居ゐるんだからね、些ちつとも信用あてに
成なる國せんせい手ていぢやない。女かみさん房らんが病びやうき氣きだつて、決けつして診みて
貰もらひなさんなよ。」

二

「失しつれい禮れいな事ことを云いへ。」
と外ぐわいたう套たうの片かた袖そでを匆はねて、拳こぶしを突つ出だして威おどす眞ま似ねし
た。但たゞし片かた頬ほ笑ゑみの、其その片かた手ては、中ちゆうふう風ふうの如ごとく、ぶ
ら／＼で、

「汝きみの情いろ婦めづぢやあるまいし、築つきぢ地ぢ河が岸しへ病びやうじん人にんを拾ひろ
ひになんか來くるもんか。挨あいさつ拶さつをしたんぢやないか。
是これから知ちかづ己きに成ならうと云いふ鍋ミスチアなべ焼やき君きみ だらう。其そこ處こで

先づ内君の健康を訊いたんだ。即ち泰西の禮さ、日本ほんの兄あにいは是これだから困こまる。」

「何か言つてら、泰西の禮は屹きつと、あれだらう。へい、媽かゝあ々は達者たつしやで、と返事へんじをすりや、年紀としは幾いくつだと訊きいて、宗旨しゅうしは何なんだ、で葬禮とむらひは何時なんどきかと來くる、お極きまりなんだ。」

「縁起えんぎでもない事ことをおつしやいます。」
と餛飩屋うどんやは七輪しちりんを煽あふいで居ゐた腰こしを伸のして、陰氣いんきな顔かほして、

「媽かゝあ々はどつと床とこに就ついて居をりますものを・・・」
と、勢せいのない聲こゑを出だす。

「おや、惚氣のろけかい。」と角袖かくそでは、鳥打とりうちの庇越ひさしに目めを圓まるくする。

「惚氣處のろけぢやうぢやございませんよ。」
「眞面目まじめか、鍋焼なべやき、そりや何どうも助たすからんな。」
と、ドクトルが故ゆゑらに眉まゆを顰ひそめた。

「え、旦那だんな助たすかりませんでございませうか。」
「不可いけないぜ、不可いけないぜ。」

と角袖は高聲で、

「小父さん、慌てなさんな。餘程何うかして居るぜ、此の人は。眞個に女房が煩つて、心配をして居るんだね。」

「へい、其に、容體が何うも思はしくございませるので。」

「驚いた。」とドクトルは頸を窘めて、ヤケに帽子をぐつと壓へた、が、額を洩れた緑の髪が美しい。

角袖は頬を叩いて、

「心棒が恚う滅入つて居ちや、些と相談が煩ケしさうだ。」

「何故、何故相談が煩ケしい？ 骨折賃を出したら可からう。」

ちやらりと軽く雪駄が鳴つて、影の姿が看板の明の前へ、かすりの羽織に成つて出た。襟巻を深く口許まで引包んで、鼻筋の通つた、目の鋭い、眉の迫つた、年紀は二ツ三ツ上らしいのが、スコツチの書

生帽子で、胸高に腕を拱いて、二人の中へすつくり立つ。

と其の後へ最う一人、外套も、襟巻も、眞黒なのが續いて出て、些と明を隔て、一寸前後を見て立停まる。

爾時、媚かしい薫がはつとすると、袖を竝べて來たらしい其の人から、姿が離れて、雪のやうな白足袋、すら／＼と地を敷くばかり、薄い駒下駄の音を靜かに、コオトはなしに、銀鳩羽に白筋の肩掛で、襟脚は隠れたが、肩の細いのに縮緬の五ツ紋の羽織、着こなしよくすらりとして、内懐の乳房をせめて、物思はしげに胸を抱いた、左右の袖は氣まゝに開いて、兩方へはらりと投げたが、其さへ瘦ぎすにひつたり着く。枝に節なき柳腰、淺葱に柳の長襦袢、しつとりと、鐵お納戸無地のお召の二枚襲、淺く取つて引揚げて、扱帯で留めた、かはり裏、裾捌にひらめいても、矯娜なれば衣摺の音もなく、青年たちの群を抜けて、盥鈍屋の荷の後ろへ廻つて、普請場の其の板圍の板に肩を凭らせて、立直つて、總髮の銀

杏返ふがへし、洗髪あらひかみの濡色ぬれいろ立つ、筋すぢの通とほつた濃こまやかな鬢びんの後おくれ毛げから、片頬かたほを透すかして、ト湯氣ゆげの立たつのを見越みこす、ふつくりとある睡まふたのあたりが梅うめの蕾つぼみの俤おもかげする。

「まだ、何どうして、其處そこまで相談さうだんは運はこびませんやね。」と、角袖かくそでは新來しんらいの其その絣かすりの羽織はおりに言いつた。

「早くはやしなくつては爲しやうがないな。此この通とほり、穿替はきかへの草鞋わらぢを提さげてる、忙いそがしい身みの上うへぢやないか。」と羽織はおりの下したから引ひきだして、尻尾しつぽの如ごとく振ふつて見みせたは、ソナ恰好かつかうした古新聞ふるしんぶんの包つづみであるが、合あ合せ目めから香氣にほひが洩もれて、鰯すめの足あしがぶらつと下さがつた。

「ですがね、ドクトルがね、女房かみさんは達者たつしやかなんて、餘計よけいな事ことを饒舌しやべるんだものね。」

ドクトルは仰向あをむいて小兒こどものやうに、あは／＼笑わらひ、
 「僕ぼくが泰西たいせいの禮れいに倣ならつて、細君さいくんの健康けんこうを訊きくとね、
 事實じつ病氣びやうきださうで鍋曉なべやきが鬱ふさいで居ゐるのよ。」

「女房かみさんが病氣びやうきだつて、商賣しやうばいに出でて居ゐる人ひとだ。相談さうだん
 の出で來きん事ことは無なさうなもんだね。」

と緋かすりの青年せいねんは目めを光ひからす。

「唯たゞ、氣きが乘のらないばかりです。」

と角袖かくそでが断念あきらめたやうに言いふ。

「僕ぼくが乘のせて遣やる。」

此この時ときドクトル大おほいに氣競きほつて、先刻さつきから片手握拳かたてにぎりこぶし
 を突出つきたす時ときにも、肩かたを落おとしてふら／＼と振ふつて居ゐた、
 手て棒ぼうかと思おもふ其その片袖かたそでを開ひらくと、煽あふると共ともに、手て
 品なで鳩はとを見みせる體ていに、二升入しゅうじりの白鳥はくこが羽打はねうつが如ごとく
 顯あれる。其その細首ほそくびを丁ちやうと握にぎつて、ドン。

「さあ、鍋焼なべやき、話はなしは是これなんだ、是これなんです。」

と、笑わらひながら、一寸指ちよつとゆびさしをして、

「此奴こいつの欄かんをして貰もらひたいんだ。」

きよろついた餛飩屋は、松の中の梅一木、留南奇の薫る方をぬすみ見した、目を返し、

「へい／＼、皆さんで召飲りますお欄をつけるのでございますか。へい、お熱くいたして差上げませう。」

「まあ、待ちたまへ、いづれ何だ、お熱くもして貰ふけれど、此處でぢやないんだぜ。」

と角袖は頤を壓へて、

「ねえ、其處が相談だつて事さ。」

「では何處なんでございます。」

「洒落か、鍋焼。」

「又混つ返す、ドクトル黙つておいで。僕が分る

やうに説明しよう。」

と襟巻から、顔を出して、紺の羽織が、への字に

結んだ唇を解いて、

「たかゞ斯うだ、餛飩屋さん、まあ、一目見ても

分るだらう。」

「分るとも！ 土方か、巾着切……」

「ドクトル黙つておいでよ。」

と角袖が手で壓へる。

「あゝ、然うした處はポン引が招くやうだ。」

「何を此のマドロスめ。」

「いがみ合ふ。小競合を、緝の若者は耳にも掛けずに、

「天下の不忠不孝の奴等が、是から揃つて押上る處がある。つい其の新道の、まあ、或家だ。處が御覽の通りで、一同懷中が寂しいです。寂しいが、しかし然うかと言つて、一寸お銚子を一本で、綺麗にしんみりと一間の内へ入らうと言ふ對手は、恚う竝んだ何の面に一一人も無い。」

「いづれ飲んだり食つたりさ、戦争騒ぎに騒ぐんだが、其の兵糧の一件です。此の間から熟々勘定をして見ると、御祝儀萬端差引いて、御一酒肴が一番突張る。尤も飲む事は飲むだがね。其にしても何うです、頭割一人前、三兩の上へ足が出るのは酷からう、其の御酒肴がだよ。」

「爰に於て、額を竝べて密議を凝らした。今夜はね、此方が白鳥を持参です、肴は僕が、恚うやつて。」
「と腰を捻つて、斜つかひに、件の古新聞の包を叩いて、

「御祝儀を一把。此の色男が鮭の切身。」

と言ひ懸けて、角袖を一寸見向くと、肩越に帽子を捻つて、背後に控へた黒い外套の一人と、低聲で何か話して居たドクトルが、思ひ出したやうに此方を向いた。

「三的、眞個に買つて来たか。」

「勿論さ。」

「色男、怪しいぜ。」

「見せようか。これ見な。」

角袖を一つしやくつて、懐中から出した尋常な風呂敷包。

ドクトル目金を見つかせて、

「止せ、鹽鮭を包むのに、何だ、其の紫色は。女の前で開けるんだと思つて、此の期に及んで、未だ、そんな未練を出す。いざ、と言ふ時、悪く、がんものはんぺんなんぞ顯して見るが可い、素頭をチヨン切つて、鬘汁にして食ふぞ。」

「又はじめた、後生だ、それだけは止してくれ。」

「いや、三的怯んだな。」

と緋かすりのが笑わらひ出す。と話はなし 相手あひては此この男をとこだから、餛うどん
餛ん屋やも調てうし子を合あはせて、
「へへへ、何かなに鼈すっぽん汁じゆに、お差さしあ合あひでもござります
んで？」

四

「大おほあ有あり！」
と袖そでを擴ひろげて、最もう白はく鳥てうは預あずけたから、空そらへ宣せん教けう
師しのやうに兩りやう手を上あげると、其その奮はずみにふらついて、
後あとじさりに、蹠よろ々／＼と成なる。ドクトルの背うしろを掠かすめ
て、三だい臺たいばかり、護ご謨むわ輪わの俤くまが、中なか空そらを駈かけて、通とほ
魔りまのするやう、すつと通とほつて、瞬またく間まに提かん灯ばんが颯さつと
消きえる、と時ときめく物ものの香かが仄ほんののこり残のこる。

「葦が飛びます。」

「薔薇が走るぜ。」

「ダイヤモンドの星が流れる。」

三人が口々で、居處を立亂れた。

「三的、御存じは居なかつたか。」と緋の羽織

が肩を敲く。

「眞中の島田を見たかい、名人が馬に乗る、鞍上に人なし、鞍下に馬なし、と言つた風に、ハツと人知れず、お辭儀をしたらう。花屋あたりへしけ込みの、獺に挑まれます。私の背後を榮耀らしく宙乗擬きで駈抜けてさ、嘸濟まないと思つたらう。勤する身の果敢さは、あゝ、さりとは不愜なものだ。」

と、がつくりと俯向く肩を、ドクトルがものをも言はず、握拳でドンと突く。と飛退いて、

「これ、紙衣觸りが、荒い、荒い。」
で、ふは／＼と袖を煽つて、横歩を一寸と行る。

「鍋焼、後學の爲に見て置け。鞘當の相手は獺ださうだが、此の男は鼈だ。」

「又言ふかい。」と太く慌てる。

「はゝはゝ、卑怯な奴だ。一體其の鼈 なんぞが、今夜の企ての起原なんだ。それから話さなくつちや分らない、喃、鍋焼。」

「へい。」

「今駈抜けた二番目の車の奴が其だ、と云ふが、當てにするな。しかし、まあ、其として聞くさ。此の男が其の婦にぞつこんで、爲に、勘當はされる、借は出来る、首は廻らぬ事……鼈も同様。」

と言つたが、不圍句切つて、背後を捻向き、

「兄哥、鼈の首は廻つたらうか。」

「さあ、何うかね。」と、黒い外套のは、はじめて静かに應じた。

「廻らないのは獨逸のでせう。」

と板塀の暗い處で、婀娜な聲がほのめいて、顔の白さの俤立つ。

三的手を叩いて、

「痛快々々！」 と雀躍する。

「見る、鍋焼、其處に居るのも鼈 仲間だ。蛇の道は蛇で、よく知つてら。何しろ首も廻らずさな。處を血の出るやうな酷工面で、止せば可いに、指違へる了簡で、一人、いつもの處へ、我々を出抜いて行つた、と思へ。

前方は賣つ兒だ。座敷で、貰へないと云ふのを、何うやら色男の通力で、電話口へ呼出して、針線の接吻をすると、貴下なら参ります、氣の詰つたお座敷で、お腹が空いて居ますから御馳走をして下さいなさ、何うだ、鍋焼、親類附合ひで凄からう。

何が可い、と言ふと泥鼈、と御意遊ばす。やがて、六疊に對向ひと成つたが、いや、其のお詠への長い事、凡そ三時半ばかりで持込んで、三兩が泥鼈、ものゝ見事に、する／＼と其の婦 一人で退治つけて、あゝ、食べたわ、で、帯を一つトンと遣つて、カラリと箸を置いたのが十二時だ。さあ、是からと言ふ處を、迎ひの馬車が來た、歸らうやで、座蒲團をすつと立つて、然やうなら、・・・・・・は何事だい。藝者のそんな事は此の土地ぢや當前。泥鼈の煮える

内玉祝儀うちぎやくしうぎをつけるのが紳士しんしの義務ぎむだ、と言いふんださ
うだが、我々われぐには我慢がまんが出来できない。第一だいそれ、可哀かはい
さうに、是これなる三的さんこうそ其その時はポカンとしたとよ。無む
理りはなからう。うむ、鍋焼なべやき。首くびつたけ惚ほれた婦をんなが、
それから何處どこへ行いつて寝ねると思おもふ。泥鼈すつぼんを食くつたん
だよ、食くつたのか泥鼈すつぼんよ、泥鼈すつぼんだよ、三兩りやうが泥鼈すつぼん、
泥鼈すつぼん泥鼈すつぼん。」

と咽喉のどを緊しめられるやうな泣聲なきごゑを出だすかと思おもへば、
「ウム。」と唸うなつて、ドクトル、其その大だいな脊せ
丈けで仰向あをむけに反そる。

五

「何どうかしておくれ、おい、此この通とほりだ、始末しまつに

不可い。
「

と、三は弱つた聲して、板塀を透かして叫ぶ。

「寒いのね。」

と呟くやうに言ひながら、蔭から荷の中へ斜かひに肩を入れた、梅の紋に細い影さす、撫肩の其の懐手のまゝ、細面の横顔が、餛飩屋の額と擦合ふばかり向うへ並ぶと、冷たく見ゆる雪の頬に、看板の明り、ほのかに射して、淡いが、くつきりと靨が入つた。

「一杯おくれな、小父さん。」

「お餛飩で？」

「否さ、茶碗だよ。」

「えゝ、お預り申しましたのは未だお欄をつけま

せんが。」

「冷酒で可いの、結構だわ。」

「豪い！ さすがは」

と三的^{さんこつ}四邊^{あた}をニし、

「姉御だ。」とばかり、言ひかけた名は言はな

んだか、若菜屋の分の藝者で、お勝と言ふ、長唄の上手である。

「其處を見込んで連判に加へたんです。屋臺で立酒は難有い。」と緋のは莞爾する。

「其の元氣だもの。あらかた病院を注込んででもマドロスを振附けるんだ。――小父さんお聞きよ、何か今の話では、私ばかりが不技術のやうだがね、何ういたして、此の國手、此の脊高が足駄穿いて通ふがね、ふわ／＼、其の姉さんに嫌はれて居るんだぜ。」

「はい、恚う見えて嫌はれ抜いて居るんです、ウーム。」と、又仰返る。

「さあ、串戯は止して饅頭屋さん、其處で今の相談だがね、これから皆が其の家に行つて、松に柳と言ふ植込の表座敷へ陣取るんだ。毛氈があるなら貸せ、眞寢子の水調子も鼻についたから、今夜は陽氣にお花見だ。時節柄陽氣と言へば火に限る、と論じて、火鉢に股火で、炭をくわん／＼と繼がせるか。酒肴には註文がある、待て、と言つて控へさせて、二三妓驕ります。尤も其の泥鼈嬢も、しよ引き込むんだよ。さあ、婦が來ると、ドクトルが、脈を見るやうに金被せ時計を捻くるを合圖に、何某……

・何時何十分より、と汽車の發着表、乃至@體温表の如く、半紙で刻限を揭示に及ぶ。即ち是れ時間を曖昧にして、つけ掛の詐偽を働く、奴等の惡計を脅すんです。」

緝が説くのに、附加へて、

「何うだ、恐しく卑劣だらう。が、そんなしみつたれた奴に此の土地は職過ぎる。千住か新宿へでも行けと吐かして見る。鍋焼、汝が對手だぞ！咽喉を緊めてウンと言はせる。覺悟をしる。」と、ドクトルが肩を聳かす。

「惚れて通ふに尻端折よ、二頭立の馬車でなくつちや相曳橋を渡るなど言ふお觸は出まい。」
と三的が疊み掛けた。

「可いかね、ぼつ／＼出掛けて、お前が其處の門へ来て、荷を下ろして居て、二階の障子が植木の中から、小火ぢやないが、次第に景氣づいて、恚う、ぼつと明るく成つた頃、はた／＼と七輪の火花を散らして、鍋焼@餛飩、——と一つ景氣よく遣つ

てくれ。」

「頼むぜ、小父さん。」と三三的か手で煽つた。

「尤も、後見には、其の姉さんが附いて居る、金春新道の第一人が、今夜は君の相棒だ、勝手な思入で道行で来るが可い。」

それ、あれを呼べ、酒が安い、で、植込の下へ荷が入る、ト婦どもの扱帯を解かせる、緋縮緬だの、鹿の子だの、此奴を繋いで綱にして、欄干から釣下げると、爛徳利を結ぶんだがね、扱帯の端ぢやづるツこけよう。其處は其の人が後見だ、懐紙を引裂いて、紙裂縫にして括るも可い。

さあ、お銚子が柳を傳つて、松の梢へ糶上ると、鯛と鹽引の鮭を焼くね。道灌山で日暮里の臭を嗅ぐ、寂滅、榮華、一時の待合よ、――しかし、女房が病氣だつけな。」

「いよ／＼行やるのか、いや、早はや何なんとも。天てん下か泰たい平へいとは申まをしながら、此この御ご時じ節せつ柄がら、空そら恐おそろしい事ことです。」

と黒くろい外ぐわい套たうのが、他たの若わか者ものに向むかつて言いふ。と紺かすりが、
「え、餛うどん屋やも合がつてん點てんしました。」
「大おほ合のみこみ點みで。」
と三さん的ごうも勇いさみ立たつ。

「女かみさん房びやうきが病びやう氣きだと言いふのに、お祭まつり騒さわぎの相さう談だんに乗のらんでもの事ことだがね。」

と黒くろい外ぐわい套たう咳くせく、とドクトルが打うち消けして、
「だつて、骨ほね折をり賃ちんが出でるんだもの、鍋なべ焼やきも商しやう賣ばいで
さ。」

「いや、しかし、お前まへさんは御ご苦く勞らうだね。」と
黒くろい外ぐわい套たうが婦をんなを見み向むく。

「否いっえ、結けつ構こう、餛うどん屋やさんの女によう房ぼう分ぶんです、性せいに合あつ
て居ゐませうよ。」

と、丁ちやんど茶ちやわん碗わんを臺だいに置おいた。

「皮肉な事を言ふべからず、大に門出の勇氣を損ずる。」と出構へで、緋のは其の尻尾を隠す。三的が一寸手を上げ、

「ぢや、姉さん、はい、餛飩のおかはりか何かで、柳の下から糶出しに成る機會は可しかね。」

「あゝ可うござんす。」と素直に頷く。

「何だか落着き過ぎますな。餛飩屋の女房分が、何うも其の貴婦人式は恐れます、第一、肩掛が當世過ぎる。ト待ち給へ、小道具を渡すから。」

三的は又懷中から、手拭を出して、荷越しに白い手に渡して、

「姉さんに被つたり。」

「恚うですか。」

「あゝ、落人。」

「梅川々々。」

「やみにも色香。」

三人が哄、と囃した時、宙に手拭が白かつた。

「源助さん。」

はアノ、忙しい息を切つて、姉さんかぶりの横合
から、いぼ尻巻の蒼ざめた女の顔が茫と出た。餛飩
屋は天秤に肩を入れて、今や、腰を切つた處で、
「やあ、お霜さん。」と呆氣に取られる。

「はあ、源助さん、お前、大變だよ。」

「えゝ！容體でも悪いかね。」

「悪い所か、お前さん。」

「おゝ。」

「女房さんが冷く成つたよ。橋向うを駈摺廻つて
搜したツちやありやしない。まあ、何しろ歸つてお
くれ。」

「然うか。」

と何にも言はないで、餛飩屋は肩を窘めて、荷が
撓むまで落膽した投首する。トさすがに一同も黙り
であつた。

「ぢやあ、急いでね、お前さんは店があるから、
私は先へ歸りますよ。お長屋の衆も詰合つちや居る
けれど、何しろほとけ様が其のまんまだから、氣掛
りだから、可いかね、源助さん、お前さん、氣落を

しちや不可いよ。確乎して歸つておくれ。はい、誰
方様も、えへ。」「
と何故か笑つて消えた、が、いや其の鐵漿の剥げ
たと言ひ、扱上つた額の色艶、いぼ尻卷の蓬蓬さ、
死んだ其の女房の顔が闇を傳つて露れて、悪いしら
せに來たかと見える。

ト姉さん冠りの婀娜なもの、朦朧として、可忌し
い白張の提灯めいて、板塀の影も塔婆らしい。紫陽
花の散るやうな銀座通の光り物、風に、びゅう／＼
と鳴る電車の音も、暗夜の虚空を人魂を載せて走る
片輪車の響くやう。

「何うだ。」と言つて、黒い外套の男が、怪い
影の如く、眞中へすつくと立つた。
「何も浮世だ。これから皆が彼家へ出懸けて、馬
鹿な、お祭禮騒ぎをするかはりに、餛飩屋について
行つて、亡くなつた其の女房の通夜をして遣らうぢ
やないか。煩ヶしい事はない。祝儀を香典にして景
氣よく遊ぶのよ。恚う見た處が、揃つて百鬼夜行の
體だ。夜中に扱帯で徳利を釣るのも魔物の所爲なら、

幽霊のお友達も餘りかけ離れた企ぢやないと思ふ。
「

七

若菜屋のお勝は唯一人、後に残つて悄乎と其處に
イんだ。

鶴の一聲とたとへには言ふが、黒い外套の、今の
發議は、其の圍體、恰も闇夜に五位鷺が鳴くのであ
つた。

しかし相談は立處に纏まつて、何が何やら、魅ま
れたやうな餛飩屋の荷の、前後に引添うて、一色燈
火を淡く染めた、影繪の動くやうに、ふら／＼と塀

を通り、續いて閉し連ねた町家の前の片蔭を縫つて、
軒の瓦斯燈の下へ灰色に成つて出たり、辻の暗がり
へ濃くなつて入つたり、やがて銀座寄の見通しあた
り、川筋へ霧が満ちた、ト見ると野原の如き中で見
えなくなつたが、通夜に行くとき聞いた所爲か、餛飩
屋に新佛の影が映してか、何だか差荷ひの葬禮が通
抜けたと言ふ氣色であつた。

水の中へ灯したやうに、遙に交番の明が霧に濡れ
て、紅玉色の美し點れたのが幽に見えたが、何處の
だか能くは分らず
寂しい婦の褻下に、今しがた冠つた手拭が、夜風
に寒く、霜が數いたやうに落ちて居る。

これは、婦よりも一同が断つた。餛飩屋の相棒は
勤まつても、通夜の附合ひは奇に過ぎる。尤も連中
催しの立女形で、一舞臺の給金がお約束で出て居
るから、今夜中は自由な身體、入用は此方持ちで身
上に及ばず、鍋焼餛飩の口直し、情夫の蒲焼うん
と食へ、と夥間同士の説に因れば、敵役のドクトル
が、捌けた大腹中は可かつたが、敢て泰西の禮だ、

と稱へて、別れの握手……其も可い。接吻
だと突然搦んだ、肱を遮る、雪の細腕一文字で、梅
の梢の霞がはづれた。

身に染む夜氣も物悲しい、其の途端の身動きで、
羽織の肩の、辻つたのを、引上げもしないから、そ
がれたやうに姿も細く、熟と、一同を見送果てた目
を返して、足許の手拭の色を視めたのである。

時に向う側の軒下を、すつと通つて、先刻、連中
がぶら／＼出て来た、あの曲角を縦に抜ける邊から、
急につか／＼と足早に成つて、橋の方へ行かうとす
る男があつた。

「關さん。」と此方から、低聲ながら力を籠め
て、婦が其の男を呼掛けたが、顔を上げて見定めも
しないので、はじめから連のものが不意に足疾く離
れて行くのを、拗ねつゝ呼留めるやうな物越に聞取
られた。

黙つて立停つたが、臆病らしく肩をすばめて窘ん
で動かぬ。

「關さん、此方へ来て下さいよ、一人で心細く成つたんですもの。」

男は眞直に胸を押し、町の眞中へ歩行いて寄つて、

「誰だ。」と少いが、些と沈んだ聲。

「私です。」と言尻を懐へ消すやうに頷を襟につけて寂しく答へた。

「あゝ、お勝か。」と傍へ寄ると、脱兎の如く、突きつけるやうに肩を竝べて、男の袂をぐいと引く。

「驚いた、唐突に呼ぶんだもの。お前、此の暗がりに、能く私だと分つたね。」

「暗がりだつて、闇夜だつて、思つた人が分らないぢや、盲人の女房は何うするの？ 私や目が潰れても、貴下の顔は見えるんですよ。関さん。」

と覗込むやうにして、
「私が此處に居るのに、突抜けて何處へ行かうとしたの。」

「何、私は些とも氣が注かない。又こんな處に立

つて居ようとは思ひも掛けずさ。第一暗くつて、お前、分りつこはなからうぢやないか。突然、關つて言はれたんで、暗がりだもの、お前吃驚して、動悸がして居るくらゐなもんだ。」
と續けざまに胸を叩いたが、何となく息忙しい。

八

「でも何でせう、私が、呼んだから動悸がするのね、動悸でまあ可かつたわ、黙つて知らない顔をして居たら、貴方腹を立つたでせう。」と、ものありさうな口吻する。

關は一寸口籠つたらしかつたが、直ぐに些と早言

葉で返した。

「可怪いね、お前がこんな處に立つて居ようとは、思ひも掛けなかつたと言つたぢやないか。居るか居ないか、知りもしないものを、聲を掛けてくれないツて、何も腹を立つ譯はなからうと思ふ。」

「關さん。」

としめやかに婦が、

「水臭い。恚うした中ぢやありませんか。貴下だつて逢ひたいでせう、私だつて逢ひたいわ。其に何も隠立をするには當りません。見得も様子も昔の事よ。よう、關さん、貴下先刻から其の曲角を出たり入つたり、此の通りを隠れちや行つたり來たりして居たんだもの。お客に連れられた身體ですから、氣儘にももの言へないし、あゝ、寒いでせう、屋臺店でも構はない、二人で暖いものでもと、然う思つて、貴下が其處を歩行く毎に、私や身體を刻まれるやうだつたわ。」

と袂を離して俯向く、と少時して、

「一言もない。我ながら餘りしみつたれた了簡で、

お前まへに積つもられるのも恥はづかしいくらゐだが、何なに、まさか、いくら逢あひたいツたつて、燈あかりの點つく時じぶん分から、若菜屋わかなやの前まへを迂路うろつくやうな狂人きちがひ染じみた眞似まねをしたんぢやない。些ちつとばかり用ようがあつてね、此この邊へんへ來きた處ところが、何なんだか最もう可笑をかしくらゐさ。濠ほりの獺かはつそが川かは筋すぢへ出でて居ゐて魅つまむんぢやないかと思おもつた。無性むじやうに橋はしを渡わたつて此方こつちへ來きて見みたくて堪たまらないもんだから、卷まきたは苳じでも買かつて吸すつて歸かへらうと思おもつて、横町よこぢやうへ入はいつた處ところが、先刻さつきの、あの連つれの中なかにお前まへの姿すがたが見みえたらう。

あゝ、久ひさしく逢あひはない。何故なぜか、又まためつきり瘦やせたやうに思おもはれたもんだから、．．．．．苦勞くらうはお互たがいに山やまほどある。其それは珍めづらしくはないけれども、然さうでもない、何なにか急きふに心配しんぱい事ことでも出で來きたんぢやないか、其それとも又またかね豫わすらて煩わづらつて居ゐたんだのに、苦界くがいの事ことだ、推おして出でたんぢやなからうか、と思おもつたり。

何なに、景氣けいきよく燥はしやいで通とほる處ところを見みたんだと、こんなくちに愚痴ぐちらしくも成ならなかつたんだが、酷ひどく鬱ふさいだやうな様子やうすだつたんで、氣きに成なつて歸かへられない。其そのの中うち餛飩屋うどんやを捉つかまへて、皆みんなが面おも白しろさうな高話たかばなし、つい聞きくともなしに角店かどみせの廂ひさしの下したに、眞個まっこうだよ、ぴつたり

附くっいて小ちひさく成なつて立たつて居ゐたがね、何なんだか遠とほくか
ら、お前まへにだけは顔かほを見みられて、外ぐわい聞ぶんが悪いわる、見みつ
ともない、と目めで言いはれるやうに思おもはれるもんだか
ら、静ぢつとして居ゐられないで、迂う路ろ々々、して、嘸さぞ、野の
良ら犬いぬでも歩あ行ゐてるやうに見みえたらう。お勝かつ、いく
ら意い氣く地ぢが無なくつても、まさか恚かうぢやなかつた
け。
「

「否いへ、よく迂う路ろ々々、して下くださいました。私わたしに取とつ
ちや馬ば車しやで駈かけて行ゆく人ひとより、どんなに嬉うれしいか知し
れません。ですが、貴あなた下やつも竄やつれたわねえ。」

「何なに、氣きの所せ爲ゐだ。私わたしは心しんが、ぼんやりだと見みえ
て、氣き苦く勞らうするほどに瘦やせはしない、お庇かけで身からだ體たは
達たつしや者やだよ。」

「でも何なんだか細ほつりして。」

と密そつと背せ中なかに袖そでを當あてゝ、
「病やみ上あがりのやうだわねえ。」

「そりや大だい丈ぢやう夫ぶだと云いふ事ことさ。嘘うそだと思おもふなら、
あの瓦が斯す燈とうの明あかりへ行いつて、薄うす髯ひげの生はえた顔かほでも見み
が可いい、さあ、行いかう。」と出でさうにする。

「まあ、待つて下さいよ。染々顔も見たいけれど、何方へ向いても八方塞り、明るい處へ出て行つちや別れるのか早くなる。まあ、密として居て下さい、話が澤山あるんぢもの。」

「
」

「ねえ、関さん。」

「何の！ 態々明るみへ出て、こんな面が見せたからう、然もない事を業々しく言つて、實はお前の顔が見たいのだつた、お勝。」

と言つたが、急に黙つて、慌しく、
「泣いちゃ不可ん。往來で見つともない。」

「而して、母様の病氣は何うだい。」

お勝はうるんだ含み聲。

「え、難有う、悪い方ではないんですけれど、何うも不可くつて困ります。又昨日から寝たんですつて。」

「熱が出たのか。」

「はあ、風邪が抜け切れないのですよ。否ね、すつかりよく成るまで、寝て居られると可いんだけど、親父が御存じの身體でせう。」

「困るなあ、中氣のやうぢや、長いから。」

「餘り酒が過ぎたから、だつて今更仕やうがな

い。」

と投げるやうなもの言ひで、

「ですから、母親も養生が仕切れないのよ。些と天窓が軽いと思ふと、直ぐに起きて働くんですもの、又直にぶり返すんです。昼間ね、七歳に成る末の妹が内へ来て、姉ちゃん、これこれだつて、他に便るものはなし、自分で氷嚢をいぢるんです、冷い手をして、私につかまつて言ふけれど。」

又聲を曇らせた。――男は固より無言なり。

「其の私が、矢張ぶら／＼して、二階に寝て居た處ですもの。幾度もあるこつたし、然う然う我儘を言つて、又内へ看病にとも言ひかねる。其も賣盛つてゞも居る時なら、些とや密と勝手な眞似もしますけれど、正月少し出たばかり、四五年引いて居てから以來、久しく止めて居たお酒に中毒つて、最う、しく／＼お腹が痛みどほし、何時かの晩も勿體ない、貴下に介抱をして貰つて、其で止まないさし込みですもの、薬ぐらゐで治りますか・・・不景氣な、土鍋でお粥の處でせう。

ですがね、些とでも稼がないでは、看病どころか、一寸見舞にも出難いんですから、無理に起きて、漸々髪を結つた處へ、門口から、今の方たちが、是非と言つて連出してね、茶番の心に入れつて言ふのよ。

氣樂らしいとは思ひましたが、御褒美に、卑しいけれどお約束でもして頂いて看病に行かうと思つて、寒いのを我慢して、鬺飩屋さんの連に成つて、お爛

の手傳てつだいをする處ところ、何なんですかね、殆まるで夢ゆめを見たやうだわ、急きふに其その餛飩屋うどんやさんの女房おかみさんが亡なくなつたつて、訃音しらせに來たもんですから、身體からだがあいて、貴方あなたと話はなしが出來るのよ。

最もうね、其その訃音しらせに來たのがね、薄氣味うすきみの悪い女かみ房さんで、私わたしは慄然ぞつととして爪先つまさきまで冷つめたく成なつて、闇くらさは闇くらし、こんな貴下あなたさび寂しいんだもの、平時いっもなら、あの人ひとたちに附着くついて駈出かけだして行く處ところを、眞個ほんたうに勝手かってだわね。」

と人目ひとめも月つきもない處ところ、枕まくらするやう、男をとこの肩かたに頬ほを當あてゝ、鬢びんの毛け冷つめたく莞爾にっこりした。

「貴下あなた、全まく怖こはかつてよ、でもね、恚かうして逢あへるから、むすぶのかみだと思おもつてさ、餛飩屋うどんやの女房おかみさんにお念佛ねんぶつを唱となへました。あゝ、新佛しんぼとけの媒妁なかつとでも可いい、關せきさん夫婦いっしよに成なりたいねえ。」

「詰つまらん事ことを！ 新佛しんぼとけが媒妁なかつとぢや此者こちらも亡者まうじやにならなきや成ならない。」

「亡者まうじやでも可いいことよ。」

「飛んだ、お前は。」

「あゝ、死んでも可い。」

「これ重いよ。」

「構はないことよ。」

「えゝ、倒れると云ふのに、な。」

「何だか、胸にたよりが無い、こんな身體は何うなるでせう。もう、持て餘す、然うかと思ふとスーと消えて行きさすよ、關さん、確乎抱いて頂戴。」

「大道です。」

と四邊をニす、ト婦は肩に額を伏せて、

「構はないわ。」

「馬鹿な、そんな我儘だから、病氣だと言ふ癖に、先刻も見て居りや、茶碗酒で呷つ切を遣る、あれは何だよ。」

毒薬でも飲むやうで、見て居る方の胸が痛む。せめて使られる私の方に、もつと効性があれば可、然してお前が身體を壊して、尚ほ此の上に、兩親を何うするよ！ 其の様子ぢや、苦いの、まづいの何のと言つて、屹度又薬を飲むまい、誰の身體だ、お

勝。

「勝は病氣が治りました。關さんに逢つたんで、はい、最う甘えても、酒を飲んでも可うござんす。」

十

「然うか、病氣は治つたか。それぢや何も言ふ事はない。澤山大道の屋臺店で冷酒を呷るが可い。眞個だ。養生しろ、と叱るのは病氣を治す力のある醫者でなくつては成らんのだらう。罰利生があつてこそ、意見の利きめもあるものを。――身體を案じたつて心配したつて、何の案じ效も、仕效もない、戀しい婦に遇ひたいツて、お茶屋へ呼ぶ才覺も出来ないで、餘所の男に連れられて行く後姿に、あとから跟いて来るやうな、厄作ものゝ日蔭ものゝ、銀行のしくじりなんぞ、何を言つたつて無駄な話だ。」

情人ぶつて、お勝さん、私は意見したのが恥かしい。

息とゝもに、
婦は、かつと込上げる涙を忍んで、切なさうな吐

「堪忍して下さいな、飲んだのは私が悪い。悪いけれど、貴下が其處に居るのを見たら、何だか胸が裂けるやうで、唇が燥ぐ、唾は乾く、身體はがた／＼震へて来る、無理な酒でも飲まないでは打倒れさうに成つたんですもの！ 關さん、眞個に此頃ぢや、誰方が、案じて下さると思ふから、いつぞやお約束をした通り、貴下と逢つた時ばかり、熱いのを一銚子だけ、半分づゝ飲むと極めて、外の時は些とも飲まないで居るんぢやありませんか。

ねえ、少い内は可かつたけれど、既二十五にも成つたもの。杯の綾がないと、殆で狐が離れたやうで、そりや貴下、お座敷の勤め難いぢやない事よ。それでも熟と辛抱して、出来ない我慢をして居るのも、末を思へばこそなんだわ。些どの事に腹を立てて、直きに貴下は腹を立てさ。婦は弱いものだのに、夜もおち／＼寐られないほど、逢ひたがつて居

るものを、優しく言つて下さつては、貴下、男が棄
るんですか。

何かと云ふと二言目には、意氣地がないの、効性
が何うの、働かないの、と仰有る！ 聞く身に成
つて下さいな、卑下をなさる貴下より、親姉妹が困
ればツて、何のお世話もしないで居る私の方
が……そりや貴下にばかりぢやない、様子を
知つてる朋輩衆にも、何のくらの肩身が狭いか知
れませんか。

貴下こそ働きのない私のやうなものが對手で、ど
んなにか御迷惑でせう。私は其が望みなんです、効
性のない、意氣地のない、お金子のないのに惚れま
した。はい、江戸兒は自棄にでも馬車や自動車に乗
つたのは嫌ひです。堪忍して下さいなね。」

「悪かつた。」

と顔を上げて、

「いや、皆自分から僻むんだ。實は心配をして
も、案じてても、母様は、父様は、お前の身體は、と
言ふ下から、あゝ、口ばかり、松の葉だけの見舞の
印も、小遣も上げられないと思ふと、つい、聞きか

ねるくらゐで居る。

「なぞツて、言ふのが矢張お為ごかし、しんせつごかしで、體の可い事を言つて、お前を恚うして引張つて饒舌つて居たいのかも分らない。」

「お勝、さあ、こんな事をして居る隙に、お座敷の分にして、一寸母様の病氣見舞に行つたら可からう、決して拗ねて言ふんぢやない。其の證據には其處等まで一所に行く……久しぶりで、あゝ、假橋の方が情がある、なんのと言つて、二人で出雲橋が渡つて見たい。」

「と立直つて、袖を掻込み、」

「もうし、お厭でもございませうが。」

「と寂しく笑つた。」

「參りませうかね、今の方たちは居ないけれど、何處かで一寸柳家へ電話を掛けて、座敷に居るつもりに含んで置いて貰ひますわ。」

「柳家だと、又、對手は私だと思はれやしないか、然うしたら悪からう。」

「否、貴下が久時に成つてから、柳家へ来るのは、今の、あの方たちですから可うござんす。」

「あの方たち、お前然う言へば、チヨツ、亂暴な
奴等ぢやないか。往來とも言はないで。お勝、お前
が、板塀に押着けられて、白い手をぱた／＼と藻掻
いた時は、あゝ、私に働があつたら、と思つて、つ
い火のやうな涙が落ちた……。口惜い、お前
のやうでもない、突飛ばして遣れば可い。」

「否、近頃は氣が折れて、お客 大事に思ひます。
關さん、察して下さいな。……。厭だわ、外
套の袖があつちやあ、暗い處だけ、ね。」

歩行き出したが、不圖男が、

「お前襟巻がないぢやないか。」

「あゝ、然うね。」と薄い肩をスウツと撫でる。

「何か、彼處に落ちてたのか、然うぢやないか

い。」

「否、あれは手拭です。然う、先刻詰まらない眞

似をする時、襟巻を取つて荷の上へ置いたつけ、餛

飩屋が擔いで行つたんです、まあ、うつかりして、

私つい。」

ほゝゝ、とひそめいて一寸笑ふ。

「串戯ぢやない、寒さうだな。」

「寒いわねえ。寒があげたと云ふのに何うでせう、

爪さきが切れさうよ。こんなぢやなかつたが、私や

血の氣が少くなつたんでせうか知ら。」

「冷えちや悪いな、急がうよ。」

「厭ですよ。成るだけ靜に、彼方へよつたり、此

方へよつたり、酔つたやうに。」

「恚う不景氣ぢや、酔つたとは買つてくれまい。

人が見たら腹が空いて、ひよろついていると思ふだら

う。」

「何と思はれたつて構やしない。いつかのやうに義理のある座敷へ貰はれて、然うね、丁度此處等だつたわね、貴下が一足前へ出て、ふら／＼歸つて在らつしやるのを、背後から腕車で乗越しをした時は、あゝ、濟まないと思つてさ、

『失禮』

と突伏して、振落した簪より、私の身體が其のまんま、投出されゝば、可いと思つた。其から見れば増ですわ。」

「しかし何しろ可い鹽梅に人通りが些ともない。」
「天道様のお情です、次手に、何うぞ、いつまでも暗うございますやうに。」

「天道はお情で、朧月もないけれど、燈明がありや仕方がない。」

「眞個に、瓦斯燈なんか點けなきや可いのに、憎らしい人達だよ。何處から風が吹いて来て、私たちの行く前を、颯と吹消してくれゝば可い。」

「そんな風は無常の風だよ。向うの交番の燈まで一時に消えて御覽。そら／＼餛飩屋の女房が！」

「あゝれ。」

「見たが可い、臆病ばかりが、暗やみが希望もな
いものだ。」

「ですがね、關さん、冥土つて云ふのは暗いんで
せう。」

「當然さ。」

「最う私は、一層二人で冥土へ行きたい。邪魔な
人目も煩雜い事がなくつて、どんなに嬉しいか知れ
やしない。」

「。。」

「而してお祖母さんにも逢へるんだもの。」

「お勝。」

「あい。」

「私は頃日妙な事を考へる。―― 恚うした
處が、如何に考へても、金持にやなれず、夫婦にや
なれず……其の成れないのを、何うにかし
たいと考へるくらゐなら、一層の事、お前の其のお
祖母さんに成りたいと思つて居るんだ。大層可愛が
つてくれたつてな。柳家で、いつか、夜中に目を覺
まして、明方まで話したつて。」

「えゝ、可愛がつてくれましたとも。八歳の時に別れたけれど、最うしみ／＼忘れられませんか、此の年に成るまで、何を缺いても、命日に、お墓詣だけはして居ます。」

「其の人が、負ぶをしたり、手を曳いたり、長唄の稽古に連れて行くのに、何故か、眞紅なふつくりとした紐を結んだ、小さな塗笠を――其か可愛らしい、と言つちや冠せて歩行いたつて、――二重頤の眞白なのが、其の紐で、目の清しいのが、愛くるしいつちやなかつたらうと思はれるよ。」

「貴下、何ですな。」

「まあさ。」

「そりや可愛らしかつたんですつさ、但しおそ祖母さんにはでせうよ。」

「と其を聞いてから何故か知らん、寢て居る時も床の間に、お前の他に、可愛い其の八歳ばかりの人の形がいたいけに、慥う。」

と言つて、顔を向けて、婦の顔を一目見るや、
「それ顔に赤い紐が。」と言ふ。

時に瓦斯點けた軒の明が、眞白に二人にかゝつた。

十二

「あゝ、泣いた臉が赤いんだ。」

と二人は熟と顔を見た。が、姿は颯と左右に分れて、眞中を二三人、衝と抜けて、振返つて其のまゝ通る。

と明の裾が一波打つて流すやうに、二人の身體を灰に推して二つめの夜の隈へ跽音もせず送り込む。

「關、關さん。」

「見つともない泣くなんて、何だ、大きな態をし

て。
「

「大きな態でも八歳です。關さん、貴下がお祖母さんの事なんか言出すんだもの。私……」

「眞個だよ。爾の時までは一端、若菜屋の姉さんだと思ふから、お前に對して、恥も慮外も知つてたけれど、最う嬰兒のやうに可愛くなつて、一人で歩行くと考へると、電車の路も憂慮で成らない。況して大勢の客あつかひ、撥られたり打たれたり、熱鐵を飲むやうな熱爛ぢや強ひられる。足袋跣足で勝手口から脱出した事さへあると言ふもの、藝者だ、と思ふから、よく振附けたと云ふものゝ、八歳の兒だと思つて御覽、お祖母さんが手を曳かないぢや、好きな稽古にだつて遣られはしない。お剩に此節ぢや、身體は弱し、寢て居るのは他人の中で、然も金子で縛つて置いて、手も足も伸ばされない主人の内だ。其處へ兩親が煩つて、七歳に成る妹が看病をするんだつて。氷いぢりした冷い指で、お前の瘦せた手を握つて、姉ちゃんつて泣いたかい。おい、お勝、私は他に望みはない、此の儘白髪にも成つ了へ、片時でもお祖母さんに成替つて、罪も報も何にも知らずに一度莞爾する顔が見たいな。」

や、何うした。」

「あ、痛々。」

「差込むか。」

「あつ！ あ、痛々。」

「困つたな、澤山悪いか。えゝ、確乎しな、困つ

た。待て／＼、腕車ぐらゐは工面が出来る、我慢し

なよ。」

「あ、貴下、何處へ。」

「腕車だよ。」

「待つて下さい、私は可厭です。別れられない、

別れられない、別れられない。死ぬほど好いた男で

も親には代へられぬと思つたけれど、貴下の膝に突

俯して思ふ存分泣かないぢや、私は今夜歸りません！

たとひ死目に逢はないでも一晩だけ別れない。今

が、今何うと言つて變のある事もなし、否、否、貴

下は何うでも私は肯かない、もし、柳屋へ行きませ

う。」

「又、我まゝを言つて困らせる。」

「だつて、我まゝも困るけれど、優しくして鬱ぐ

よりは苦勞がないだけ増だつて、いつかも言つたぢ

やありませんか。」

「言つたにもしろ、事に因らあね、お前考へて見
ておくれ。借金も丁として、柳家へ顔を出せるやう
ならこんなに、しみつたれて居やしないよ！ 何處
も彼處も、と言ふ内にも、分けて柳屋は鬼門ぢやな
いか。夫こそ二人にや牛頭馬頭だ、角も鐵棒も可恐
しい。」

「關さん、私が承合ひました、御心配はございま
せん。」

と確乎言ふのも胸を惱んで、きつと壓す手が震へ
ながら、

「何處か他へと思ひますけれど、今夜は柳家に居
る分ですから、ひよつと電話でも懸つた時私が居な
いと主人に悪い。」

これから行つて、濟みませんがね、一寸植込の處
に待つて、下さい。先へ一人で私が入つてお帳場へ
ぴつたりと兩手を支いて、指に頭をつけませう。

「おかみさん、御恩に被ます、關さんに逢はして
下さい、後生です。」

ツて、頼みますわ。―― 悪かれと言つてぢや

なからうけれど、貴下と云ふものがあるのを知つて、他のお客の言ふ事聞けつて、もう癢つちやありやしない。先方までも不機嫌だし、是非と頼めば座敷だけは出るもの、それから此方、碌に口も利かないけれど、向うも名代のおかみさん、苦勞に心は弱つても、若菜屋の勝ですよ。私が手について頼むんです、あんな人だけ分りも早い。

『あゝ、情死するならしても可い、内へあかずの室を拵へて土地の名物にして置かう、幾日でもお遊び。』

と屹と然う言つてくれるんですから、可愛が眞實なら、意地も我慢も忘れて下さい。よう、關さん、後生ですから。」

十三

ふたり
二人が翌日よくじつの晩方ばんがたまで居た、柳家やなぎやの條くんだりは・
・
・
・
省はぶく。

十四

其その日ひ、日ひが暮くれてから、渠等かれらの姿すがたは、赤坂あかさかの圓ゑん
通寺つうじの門もんに見みえた。婦をんなは膝ひざに褌つまを挟はさんで、縹しゆす子の帶おび
を引掛ひっかけにしたらしく、其その端はしが、羽織はおりの裾すそから地ち
に敷しくばかり、下したに居ゐて伏拜ふしをがんで・
・
・
・
男をとこは
立たつて俯向うつむいて。

後あとで知しれたが、御寺おてらは婦をんなの家いへの菩提所ぼだいしよで、昨夜話ゆうべはな
した、お勝かつの祖母おほぼの墓はかがある。けれどおがも拜おがんだのは
墓場はかばではなかつた、門もんの前まへから。然しかも此この邊あたりは夜よるが

早く、最う潜戸も閉つて居た。――

「祖母さん、然やうなら。」

すつと立状に片手拝をして、お勝が、

「關さん、難有う。」と派手に言ふ。

「生憎だつたね、門が閉つて。最う些と早く出て来れば可かつたつけ。まあ、緩り拜んでおいでよ。」

「何時まで居たつて、祖母さんと貴下には、おなごりは盡きません。些との間でも離れるのか厭さに、眞暗に成るまで柳家に居たし、電車が二度まで停電をするんだもの。でも氣の利いた電車だよ。然う言や、車掌が好い男だつたわ、一寸貴下に似て居たよ。」

「丁度可い、早く歸つて、信號手の口でも探さう

よ。」

「然うすりや私が、貴下の足許で轢殺されて、銀行や御養子先をしくじらせたやうに、又しくじらせて遣るから可い。」

とずん／＼前へ立つてさつさと行くのが、新橋へ歸る路でない。

「お勝、おい赤旗だ、お待ち、そつちへ行つては違ふ。」

「可いのよ、此方へ来らつしやいよ。まあ、最う少し歩行きませうよ。」

「馬鹿な。」と言ひながら誘はれて續くのか、圓通寺坂を上らないで、右へ入る、穴のやうな崖下の徑であつた。

「何の道、見附まで歩行くんぢやないか。」

「だつて其方は明るいわ。其に何うでせう、憎らしい、場末の癖に、木鞆町邊の今時分より人通が多いんだもの、いけ好かない。」

「用のある人が通行しますさ。」

「ですから用のある方は、さつさと其方へ行らつしやいよ。私なんざ浮世に用のない身體だから、好いで、此方へ参ります。何うぞ、もうお歸り下さい。然やうなら。」

とずん／＼行く。出がけに撫附けた毛筋も亂れぬ
總髪の掬 銀杏が、崖の薄と刈株と擦々で、路の奥
から霜の筋をどんより辿る、道路安全と書いた瓦斯

燈が、何處へ路しるべをするやら。目も鼻もない冥土の蛇の群るやうに、土の崩れ目から、押覆さつた樹々の細根を、兩側詰めて照らし出すと、あのまゝ肩掛もせず、餘寒に曝された襟脚の冷たさうなのが、頬を掠めて刃めく熊笹のばさつく中へ、消え残る雪かと思えて、樹の根が縊殺しも仕兼ねまい。闇がりへ入る姿は、次第に裾を消して、寂しい肩が臍に薄い。

男は二三間隔つまで、無言で、此方に突立つたが、爪先に倒れた破垣の竹の節を、がつしと踏んで追従つた。

「馬鹿な、女一人で行かれるものか、方角も知らないで。」

「知つてますよ、圓通寺様で御經があつて、それからお祖母さんを火葬場へ送つた路です。」

「お勝。」

「あい。」

「そんなに後を追ふのかい。」

「なまじつか、なまじつか、一日一夜一所に居た

ら、もう些との間も分れられない、關さん私は死にたいわ。」と翻然と向いて、ひつたり鎚る、と胸を抱いて、はツと泣く。

「確乎しておくれ、痞かい、此の、帶の堅い物は、や、刃物でも持つちや來ないか。」

「否、それは、内の人へ體裁もあるし、年寄つたお師匠さんも樂にして待つてますから、晝頃貴下を待たして置いて、お稽古に駈出て行つて來た、・・・箱屋が持つて來たでせう、撥と本の袱紗包なの。」

「どんなにも働いて、其のかはり、無事に座敷だ
けで歸して貰ひたいと思へばこそ、此の年に成つて
まで一中節の稽古もする。忘れまいたためなれば、屈
託のある貴下を傍へ置きながら、習つて來たのを暢
氣らしい、黒髪くろかみの、何なんのつて、温習おさらひもしたんぢやあ
りませんか。

最もうそれだのに、此頃このころぢや、端唄はうたを聞きくお客きやくもな
い、さのさが濟すめば口説くどくんです。振ふつて遣やりや其
つ切きりで、張合はりあひで來くる意地いぢもない、又また他様ほかさまを聞きくん
でせう。

然さう言いや恩おんに被きせがましい、貴下あなたがあるから、と
言いふやうで、二言ふたことめにや引退ひきさがる、私わたしは綺麗きれいに引退ひきさがる、
と關せきさんはおつしやるけれど、何なんの私わたしたち藝者げいしや風情ふぜい
が、道みちも操みさおも知しりませんが、好すいた男おとこは一人切ひとりきり――
またとひ手足てあしを縛しばられても厭いやな奴やつには抱だかれやし
ない。それとも貴下あなたが足腰あしこした立たないで、ひもじい思おもひ
をすると云いふなら、濱町はままちやうの河岸かしへも立たつけれど、親おや
のためでも、主人しゆじんへ義理ぎりでも、お客きやくが取とれるもんで
すか。

ねえ、それだから、御覽なさい、數はあつても爲
に成る人がなくては、月々にも困る處へ、此頃ぢや、
ぶら／＼と煩ひ續きで、ついお茶屋にも疎遠に成り
ます。出が悪くつて遊んで居りや、そりや金子を借
りた悲しさに、待合から時間を遅くかけて來ても厭
だとは言へますまい。箱部屋へ箱が入りや、引越し
かと言ふ希有な顔で、づんぐりむつくりした女中の
奴が、

「姉さん、何うです。」

と突然言ひます。

「何が、何うなのよ。」

と笑つたのは初手の内、中頃ぢや、赫と成りまし
たか、今ぢや最う其を聞くと、わな／＼と震へるわ。
不見轉を談じられて、震へるやうぢや、勝も婦が棄
りました。象牙の撥にも恥かしい、關さん、私は何
時まで暗い小路を出たくない、貴下死んで了ひた
いわ。」

「可哀相に。人間の罰も當れ、己も・・・」
と言ふ時、ぱつさり、頭の上の枝を鳴らして、夜

鴉らすが、かあと囁ないた。

「や、厭いやなものが入はいつて来た、お勝かつ、駈かけ抜けよ
うか。」と身みを開ひらいて言いった。

徑じみぎの口くちへ、朦朧もうろうと白張しらはり提灯ぢやうぢん、鴉からすの腹はらへ點灯ひともしたや
うな色いろで、光ひかりもなく岨がけに映うつる。

「あゝ、新佛しんほとけよ、關せきさん、媒約なかうど人が出で来ました。」
と嬉うれしさうに言いひながら、恐こはいか、後あとじさりに岨がけ
へ窺すくむ、と男をとこは外套くわいたうの袖そでを開ひらいて、背うしろ後あとへ庇かばつて、
眞直まっすぐに立たった。駈かけ抜ぬける隙ひまもなく忽たちまち間ま近ぢかへ擔かつい
で来きたので。

ト藻屑もくづのやうな臭におひが芬ぶんと、ひた／＼水みづを踏ふむらし
い聲あしおと音を沈しづめて、煙けむりのやうな影かげが前あ後とさきに、さし荷になひ
も、さし荷になひ、唯ただ二人ふたり切きりで擔かついで、前まへへ立たつたのか、
白張しらはりを提さげたばかりであるから、宛然さながら闇夜やみを、人魂ひとたま
の縫ぬふが如ごとく、早桶はやけが歩ある行くと見みえる。あゝ通とほつた、
と思おもふと、何處どこかで、犬いぬの遠吹とほばえかした。

爾時そのとき、どしん、と陰氣いんきな響ひびかしたと思おもふと、白蓮びやくれん

化が砕けた風情に、早桶かはつと落ちる。

「不可え、やあ、不可え。」と一人が素頓興な
聲を放つた。

つい鼻の前で、口早に二言三言交したが、棺の前
の奴の形が消えて、白張ばかり残る、と同時に、す
た／＼と音を立て、舊來た坂下の方へ逸散に駈出し
た。

二人は避けるにも避けられず、其のまゝ暗い方へ
暗い方へと堅く成つて、よも、其の灯では映るまい、
と思ふと、悪い。恚る男女は、月や燈には隠れて
も、冥土の提灯には明さまに照らされる。

しばらくすると、後棒に居た男の、尤も既に肩を
外して、向う崖際に突立つて、路の中の早桶を擔つ
て居たのか、不躑にも聲を掛けた。

「失禮ですが、一寸、失禮ですが。」と言ふ、
柄にそぐはぬ言附。

紛ふべくもない處、關は猶豫つたが、返事をした。

「私……」

「や、失禮ですがね、巻苘のお持合せはあります
まいか。友達が持った筈だが、御覽の通り、さし
荷ひの縄が切れて、お剩に途中三度切れた。逆も繫
げないので、其處等の荒物屋まで才覺に行つたんで
すがね、一人で何うも、早桶と睨めつこぢや遣切れ
ない。」

と呵々と笑ふは何者。

十六

「お持合せがあつたら、一本御布施に預りたい。
こんな身體へ、お手渡しは恐縮だ。投げて下さい、」

投げて。」

と言つて、手をついと出したが、間近だから能く分る。なんとか白く抜いた、半纏を上へ羽織つたが、合はない襟から漏れて、下に着たのは黒の羽織、紺博多の帯で、二枚襲ねた裾端折の足が白く、足袋跣足で、頬冠で居る異様な扮装。

呆氣に取られて、關は無い袖を、無言でかさ／＼と捜して居たが、

「生憎持合せが、まあ、折角の。」

と狼狽へたやうに言つて、彼の人物の風采に對しても、餘り其が不本意だつたか、

「お前は持たんかね。」と思はず言つて、はつとした。些との間も、後に庇つて、隠して置くべき婦を、何と。するとお勝が、雅子が立つたやうに崕下からはらりと出て、

「まあ？」と言ふ。

件の男が一目見て、

「やあ！」

と言つた。

「一寸、信樂さん、何うしたんです。」
と驚いたも其の筈、昨夜の一座の連中で、こゝに居るのは、黒い外套だつた兄哥である。

「お勝。」

と言ひかけ、關と見較べ、

「姉さん、變つた所だな。」

「貴下、まあ、而して、ぢや、最うお一人は。」

「先棒は三的よ。」

「驚いたのねえ。」

とうつとりするやうに顔を見たが、フト氣がついて、

「然う／＼、卷莨はありませんが、これでお宜しくば。」

と御守殿持を帶の間から、で、驚き次手に、口許を蒼白く、提灯を覗いて、吸ひつけた、三方黄金の女持、吸口を一寸向うへ、野かげの畦の遣取りめく。

「召上つて下さいな。」

「令夫人のお手を頂く。」

と關に向つて莞爾として、

「貴下方は？」

「いや、最う。」と言つたばかり、關は悄然とした。

「お祖母さんの墓があります、圓通寺様へお参詣をしたんです。」

「はゝはゝ、似合の御夫婦、お羨しい、御奇特ですな。然う言や、姉さん、御奇特手に、お二人揃つた處を見せて、斷念のつくやうに、ドクトルに引導を渡してやつてくれ給へ。今、直に此處へ來ます。」

「矢張御一所なんですか。」

「勿論手がはり。其處の見附までは、彼奴が肩を入れたんだかね、おでん屋の店へ、景氣づけに駈込んで其から私が擔いで來たんだ。」

「ぢや、菊さんも。」と緋のを、お勝が訊ねる。

「從弟は一足先へ行つた、火葬場の係だよ。」

「係りだの何のつて、まあ。」

と今更興覺め顔に、早桶の前を退つて、

「一體誰方のお葬禮なんですな。」

「是か。」とふつと煙管を吹いたが、突のめるやうに提灯へ煙管を入れた、其のまゝ早桶に清らかな瞳を流して、

「餛飩屋の女房だよ。」

「え。」

人目も忘れて、關の袂を緊乎と取り、
「御覽なさいな、媒酌人ですよ。」

「媒酌人、」と聞咎める。

「何、いえ、くだらない事ばかり申しまして困ります。」と關は切なげに笑つて言ふ。

「可いわ。信樂さん、何うせ、新佛の媒酌人でもなくつては、私たちは夫婦になれないと言ふんですよ。」

「いや、お察し申す……が、關さんと仰有るか、貴下が聞いて下さい。姉さんもお聞き、現に似たやうな話があるぜ。此の饅頭屋の女房だ。實は、無う言つちや可笑いけれど、洲崎の女郎で、私の情婦です。

二十四の年から三年通つた。

不思議もので、さあ、恚うなると、誰が定めたと云ふでもないが、昔から掟通、心は彌猛に逸つても、手も足も出なくなつて、戸外は蓑笠でゞも歩行かねば、人に顔は合はされません。

三年目の霜月の中頃だつたね、土地の可懐さに、木場あたりを當なしのぶら／＼歩行、犇と材木が並んだのが、世間を狭くした身體には、座敷牢の中を通るやうで、冷々と袷に浸込む。其の下から、小春日の庭前に、異な番傘の乾かしてあるのを見ると、雨も槍も降つて来い、彼奴一一本肩に掛けて、素跣足で通はうものを、と直ぐに了簡が變るんだ。

尤も了簡は變つても、懷中が大丈夫、汝が素肌の皮財布で、袂にばら銭しかないのだし、歸途の車賃を一考に及ぶと、葭簀張へ腰を掛けて、團子で澁茶も心許ない。

唯まあ橋銭の出ないのか天の助けで、縦横十文字に川筋をぶら／＼。ト蘆の間へ、晝の月で、水へ映る、眞珠の影を釣つて居る人が見える。

あゝ、深山溪流の趣あり、廊下を通ふ草履の音を、琴柱に滴る玉水の音とも聞いたつけ、と唐詩選のやうな述懐で、蛤町のなかほどへ、影も茫乎とかゝつた時です。

「あゝ。」
と私の名を三聲ばかり呼續けて、背後からばた／＼と駈け寄つた婦がある。鬼界ヶ島だ場所が悪い、色仕懸けで、金子を借りた、大年増の新造の鬼かと、ぎよつと立悚んだが、然うぢやない。

件の馴染の馴染のおいらん殿、此の早桶の佛だがね。いや、其の風が、白襟の紋着、紫の裾模様、此春正

月の出来で。部屋を引摺るから夜中には納るけれど、行年積つて二十七歳の婆さんが、緋の疋田鹿の子の長襦袢で、雲龍の織出し、埋立地から小手を翳して、品川沖へ白波を立てようと云ふ縹珍の帯。紅と淺葱と段々絞の扱帯を緊めて居ようぢやないかね。御殿のお小姓だか、雛妓だか、踊子だか、お祭屋臺の更科姫だか、見當が頓と附かん。

但し美しい。辨天町から降つて來たやうな姿を、呆氣に取られて見て居ると、

「まあ、しばらく。」

と何にも言はずに、ほろ／＼と涙を流して、

「あれだけ裏窓から呼んだのに、聞きつけない振りをして、御覽なさい、こんなものを穿いて追掛けて來た。」

と言ふのが冷飯草履よ。

で、何でも寄つてくれ、親仁の内へ來たのだと云ふ。其親仁がです。――昨夜首を縊つたんだ、と言つて、薄化粧した臉を泣腫して居るんぢやありませんか。

袂たもとのばらを投げ出して、六道だうせん銭は引受けた、と云ふ大度胸だいできようがあれば知らず、剥身屋むきみや同士どうしも寄合よりあつたらう、内うちへ寄る處よるゝの騒さわぎぢやない。

女郎ぢやうらうの奴やつは世間せけん知らずで、

「お前まへさんの手てから線香せんかう一本ほん、何なによりの供養くやうに成なります。こんな私わたしの身みを案あんじて、未まだ目めを開あけて居ゐるんです、成佛じやつぽうをさして遣やつて下ください。」

と引ひつかまへた袖口そでぐちを、夢中むちゆうで、拂はらつて、一生しやう

懸命けんめい。

「お互たがひに生命いのちが大事だいじだぞ。」

と言いつて遁にげたは何どうです。

香奠かうでんの工面くめんも出来できないから、其その後のち弗ふつり。折をりも折をり、時ときも時とき、こんな處ところで出會でくはしたも、神佛かみほとけの戒いましめ、と私わたしは震ふるへながら活いきて居ゐたさね。

すると翌年よくねんの然しかも暮くれです。是非ぜひ逢あひたい、と言いふ手紙てがみが人傳ひとつてに届といて來きた。尤もつとも既もう洲崎すざきには居ゐない、素人しろうとに成なりは成なつたが、落籍ひかされたので引ひ

たのでもなし、親仁が首を縊つてから、間もなく本人病氣に懸つて、半年ばかり煩らひ抜いたが、全治の見込みがない、と言ふので、主人が證文を巻いたつて事を其となく噂に聞いて、もとより行方は知れずに居ました。」

十八

「だから私は、婦は死んだものと思つて居たんで、手紙を受取つた時、幽霊に番地がある、と驚いた。

同一深川の場末ぢやあつたが、蛤町ではないんです。

おいらんが好物の、羊羹を、榮太樓で買つて出掛

けた・・・・いや見る影もなく成つて、母親と
二人でね、丁度蜜柑箱で拵へた雛壇と言つた形で、
天井裏にも押入にも、幾組か住んでる中に、膝か
ら下は腰巻ばかり、紺の筒袖一枚、いぼ尻巻で、情
ない事には、淺葱と紅の、其の段々の扱帯が影のや
うに成つたのを締めて居ました。

何となく遠々しく成つて居たから、時候の挨拶一
つ二つしたばかりで、

『態々おいで下すつたお志は忘れません、が、
御覽の通りで、お坐んなさる處もない、其の内出世
をしましたら改めて、又何うぞ。』

と言ふ。調子が變だと思つたが、柱から、障子の
破から、古葛籠から、階子の隅から、手が出たり、
足が出たり、幾つと云ふ數知れず、蠅の怨靈が取憑
いたやうに、じろ／＼視める始末でせう。

其實居堪りはしないんだ。お許しの出たのを僥倖
にして摺下ると、

『お履物はお玄關。』と瘦せて目ばかりの顔で
莞爾した。しかし俤が残つて居ました。

と笑ひながら、店のやうな、其の節を一枚上へあげて出してくれたが、ばつたり下して、首を出して頻に戸外を視めたつけ。

既う日が暮れて人顔が分らないと見ると、歩行き出した私の後を、四五間離れて、總後架のある路地口から出たらしい、通をとぼ／＼と送つて来る。

と橋に掛つた、橋の袂へ、筒袖でひつたりついて、其つ切來ないから、此方は中頃まで渡つたけれども、何だか、氣懸りで、氣懸りで、うしろ髪を引かれるやうに、つか／＼と取つて返して、

「何か話があつたのかい。」

つて訊きますとね。

「一目顔が見たいばかり、他に何にもありません、御機嫌よう。」

と俯向きしました。

其まゝ分れて歸られますか。加賚屋で飯を食はう、と誘ふと、装がこんなで、ツて見糞らしく手を鯉口へ引込める。あゝ、矢張り婦か、可哀相に、とふと

胸は追つたが、

『身體は舊のお辰ぢやないが、八文字踏んで入れ、信樂がついて居ら。しみつたれるな、江戸兒。』

と此の脇の下で手を組んで、電燈の明い處で、店の正面へ突立つて、

『加賀屋々々、一番上等の座敷へ通せ、夫婦連れのお客だ。』

と仁王立ちで怒鳴りつけた。

婦が酔つて、

『あゝ、嬉しい。母様が欲しい云ふから、一分が鰻を頼みに来て、手がないうと斷られた、此處へ来て、お庇で女中衆のお給仕で頂きました。』

胸がすいた、氣が晴れました、實は餘りの身の上ですから、貴下の顔を一目見て、今にも死なうと思つてたんですが、些と浮世が戀しく成つた。女房にも妾にも情婦にもなれないお互だから、是ツ切斷念める、其の代り、私が死んだら今日の心を忘れないで、片方擔いで下さいませよ。』

『誓ふよ。』と杯を交したんだね。

「のたれ死をするまでも、其を力に生きて居ます。運があつたら金欄の襠褌でも着て見せませう。」
と快く別れたまゝ、何年にも逢はなかつた。一時、臺灣へ行つたと云ふ、風の便りもあつたんですがね、つい頃日です、何處か、三田邊で屋臺店を出すおでん屋の女房に成つて居ると聞きましたつけ。遊び半分通夜に行つて、死んだ餛飩屋の女房を、フト見ると其のお辰だ。

然も心魂に徹したのは、こんな野郎も男と思つて、信樂何某　ー　と名宛して、骨を頼む、と云ふ遺書が枕の下にあつたぢやないか。」

關もお勝も身震した。

信樂も聲か曇つて、

「人の情は此處なんです。婦と言や獸 同様、男の玩弄物だ、と思つて居る御存じのドクトルもね、お勝さん、其を見た時は悚然としたとよ。」

頼まれて恚う早桶を擔ぐ奴より、一言の約束に男を信じた、婦の心が頼母しい！ 嬉しくつて涙が出る。男の泣くは此處なんだ。」 と急にぢつと首低れたが、

「思遣りのある方たち、拜んで遣つてくれ給へな。」

關は俯向いて物をも言はず。

「あゝ、似たやうなお身の上前の世の姉妹であらうも知れない。お辰さんとか、寒さうねえ。」

と死身に厭はぬ、羽織を取つて、お勝は、早桶の上へ翻然と置いて。情が染みたか柩を通つて、骨を包むか、薄煙、はつと線香の薫が立つた。

「兄哥、仕様がなない此の體だ。」

と取つて返した三的は、又念入りな腹掛から股引まで、しつくりとした半纏着。向う顛巻引反らして、腕に倶利伽羅紋々のほりものこそなけれ、荒縄一束手にわがねた。片手に引張るやうにして來た、連は、と見れば、帽子の上から唐茄子冠りで、オウバアコオト着た風か。おでんの竹の皮包をぶら下げて、片手に四合入のフラスコ壘、脊の抜群に高いのが左右に動いで來た體は、正に是ドクトル鱗七！

信樂が立迎へて、

「口説かれる娑婆が煩いと言つて、ソレ、其處に居るのが死にたいとよ。」

「や。」とじろりと二人を視める。

「新佛に魔が魅したぞ。」

と三的は吃驚して、早桶に掛けた羽織を覗く。

「偏に惚れて口説いたるのみ、敢て強ひたることなし、御兩人。」

と言つて、目を皿のやうにしなから、

「ウーム。」と仰反る。

「遅い、遅い、何をして居る。」と前途から、拾った棒切を杖にして、地をかん／＼と鳴らしなが
緋の羽織が脚絆穿で、ずっと寄つたが、お勝を一目。

「驚いた、是だもの、皆がお練で遅い筈だ一人で
狼谷に居堪まれるかい、串戯ではない。」

「いや、串戯ではない、君たち。」
と信樂は、轟乎と眞中へ立直つて、

「数の少い江戸兒だ、確乎しないか。おい、若菜
屋のお勝さん、縺子の帯を締直せ。貧乏や病氣を苦
にして、弱音を出すたあ何事だい。親が困つて養へ
ざあ、操を何うのと云ふ間に、腕の肉から裂いて遣
れ！これ、三味線は武士の刀よ、象牙の撥は手裏
劍だ。逃げる對手は縫留めて、絡はる奴は切倒せ。」

死骸の山を築いた上で、立腹でも切つた時、死骸
は男が抱き緊めるんだ。お互に骨を拾ふ氣で、敵に
向つて戦へさ、附着いて居るばかりが、色の戀のと
言ふんぢやない。」

「お勝、しばらく分れるよ。」と關は顔を上げ

て屹と言つた。

「あゝ、死んだら骨を拾はうね。」と婦の聲は

朗である。

「其處だ、豪い、又惚れた、關夫人。」

と言つてドクトルが、おでんと徳利を諸手に高く、熊笹の霜を散らして、樹の根の上へ振上げる。

「素敵々々。」と三は拍手。

「おい、荷ひは出来たか。」と信樂が提灯かけ

た縄を透かした。

「大丈夫。」と三的が棒を通す。

「今度は先棒で一伸伸すぞ。」

と信樂が入交つて、

「相棒来ないか。」と言つた時、

「承知しました。」

と言ふが早い、關が其の風で棒に潜つた。

さすがに一同、是は、と言ふ。

お勝が嬉しさうに熟と見て、

「承知しましたは可笑いねえ。合點とか、何とか、

關さん。

「むゝ、合鮎だ。」

「役者。」

と白張で、三的が聲を懸ける。

「お勝は一人ぢや歸られまい、菊さん、おいで。」
と信樂が緋を見向いた。

「否、否、皆さんで、骨を拾つて下さるんでせ

う。」

「勿論。」

と應ずる下から、四邊を眺めて、

「ぢや可いことよ、狼に食はれても。」

と凜々しく言つて莞爾した。着流しの腰はきりゝ
として、見送りながら伏拜む。紋の白梅ちら／＼と
羽織の移香を闇に残して、白い灯は動きはじめた。

一人で、圓通寺坂下へ出た時、突然頸筋を抱いた
奴があつた。が、

「わつ。」

と叫んだも道理こそ。撥を逆手の腕の冴で、したゝ
かに額を當たのである。

「^{ひと}人違^{ちが}ひでせう、私^{わたし}には附^ついて居^ゐますよ。」

【完】